

アウターはいつでも、自分へ、大切な人へ、大切な人へ、アウターとネルシャツが気になる。

THE DAY

SWEAT SHIRT, T-SHIRT, SHIRT & WINTER STYLES



Feature 2
仕事部屋と
インテリア

2011 WINTER ISSUE No.30

Feature 2
大切な人へ、
頑張った自分へ、
そのギフトを



Feature 1
スウェットシャツとネルシャツ。

とある部屋で

第五回 親愛なる、永遠の野球小僧へ。

styling | Shinya Etsuda photo | Kenji Nakata story | Sanichiro Ozawa



3ステップサイドテーブル¥30,000、ラウンジチェア¥30,000、ベテムーティーズ03-3793-6223)、サンクベッドSV60,000、マットレス¥88,000、ウッドフェサータペストリー¥7,800、グラス¥1,000 (ジャーナルスタンダードファニチャー/すべてE1ホルムフリー)、ジャーナルスタンダード 吉祥寺店0422-23-4071)、ワインラック¥5,000、卓上世界時計¥15,000 (キンツツ/すべてモ03-3498-9100)、ラタンズツール¥28,000 (ローエ)、クッション¥2,500 (エムサ)、カップ&ソーサー¥1,200 (すべてクックニチャー03-3460-2530)

久

久しぶりに訪れたロサンゼルス。旅の宿は、一緒にいった友人が定宿にしているホテルだった。都心から少し離れた場所にあつて、空港からの道中に現れるドーナツ屋の大きなオブジェの看板が目印だ。カリフォルニアの乾いた風と透明な空、それとたまに舞い上がる砂埃が、その昔、こちら一帯が砂漠だったことを連想させる。枯れた殺風景な地を、人々は夢と野望を抱いて開墾していったに違いない。そして、それは今も昔も変わらないこの街の特色のひとつかもしれない。カーテンがはためく窓から射す太陽が、ベースボールキャップを日焼けさせはじめている。昨晚の試合観戦後、友人とささやかな祝杯をあげたビールが残党が転がっている。マイアミの空港から発った僕らのスター、羽田から発った僕らのスター、ともにロサンゼルススタジアムにいた。夢を叶えるためにメジャーの扉を叩いたスターと、その夢にベッタリその断片を記憶してきた僕ら。立場は違えど、白球に「喜」を愛し夢中になったロ

サンゼルスの子のナイトゲーム4連戦。ただ、ロスの子の誇りドジャースの本拠地で、マイアミを応援する者などごくわずか。ましてや僕らは安直すぎた。マリンスの地元マイアミを舞台にした往年のアメリカドラマ「マイアミバイス」のロゴが胸にデカデカとプリントされたTシャツを揃いで着ている。そんな落ち感満載な東洋人なんてマスケ以外のなものでもない。選手たちにも近づけた日、僕らが声を届けるスターでさえ、ベンチ上のマイアミバイスを一瞥だけしてスルーした。そんな珍客に、胸を指して微笑み返してくれた選手がいた。愛くるしい顔に繰り上げられた体躯のその選手は、マイアミ・マリンスのエースだと、そのとき知った。4連戦の最後のゲーム。彼が先発するという。ブルペンで投げ込みをする彼に、マイアミバイスTシャツをアピールしながら声をかけた。彼はまた微笑んでくれた。そして、マウンドに向かうとき、握っていた白球を僕らに向けてプレゼントしてくれた。クラブをしていた手に

は、硬球の重みとはまた違う、憧れや興奮や感激が入り混じったものがスリと走った。彼は、少年期に家族と命がけて海を渡ってアメリカにやってきた。祖国キューバの海に向こうにあった、近いようで遠かったマイアミの地で夢を掴み取った。カリブの野球小僧がメジャーリーガーとなった。東洋の野球小僧だった僕らは、そんな彼を大好きになった。160kmを超える速球とコントロール抜群の緩いカーブで三振の山を築く。ベンチにいるときは味方のタイムリーに歓喜をあげてガッツポーズする。ピッチャーなのに打席ではいつもフルスイングする。ファンにも気さくに声をかけて野球ができることを心の底から楽しんでる。4連戦の最後のゲーム。彼の一番手一投足を夢中で追いかけた。彼の渾身の投球に願いが込められた。友人とハイタッチしながら彼を称えた。ロスの子の刺すような視線を横目に、僕はマイアミの勝利に酔った。「もう今日は早く帰った方がいい」。ドジャーススタジアムの球団職員が冷徹に言った。

きた。4連敗を喫したロスの子がマイアミバイスTシャツを着たへんてこな東洋人に八つ当たりしかねないからだ。部屋に戻ると、彼からもらった白球を肴に友人とまたささやかな祝杯をあげた。心地よい高揚感を体中に浸透させながら、いつものまにか眠っていた。翌朝、バームツリーの上に広がる青空は、再び乾いた風に舞い上げられた砂埃でかすんでいた。しかし、この街で、たしかに、夢を追いかけける人間、夢を信じる人間の断片を見ることのできた。東洋から飛び出してメジャーの扉を叩いたスターに、その夢を記憶してきた僕ら東洋の珍客。野球が日々の暮らしの糧になっているロスの子たち。そして、祖国から亡命し夢をその手に握りしめた永遠の野球小僧、ホセ・フェルナンデス……。享年24。あの試合から4ヶ月、あまりにも突然だった物語の終焉。彼が握りしめた夢の白球のひとつは、あの日、ホテルの僕の部屋に転がっていた。そして、僕は決して君の微笑み返しを忘れない。

REISM



「とある部屋」を用意してくれたREISM (リズム)は、都心で働く20~30代の「スタイルのある」シングル向けリノベーションルームを提案するライフスタイルブランド。あたらしい暮らしに出会える。www.re-is.jp

「BOX」は、キッチンとバスルームをひとつの「箱」にまとめたリノベーションシリーズ。自由な部屋づくりが楽しめるようなキャラリを思わせる雰囲気と、使いやすい収納が魅力的。



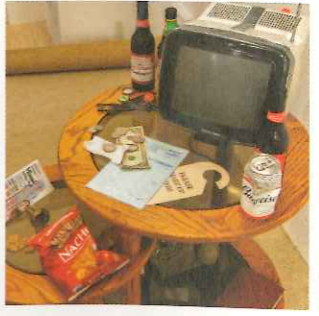
旅の余韻を包み込んでくれるベッドは、手フレームのウッド素材と無骨なアイアンの組み合わせが印象的。フレンチインダストリアルをイメージしたことから、フランスの職人「サンク」と名づけられている。



マイアミ・マリンス、マイアミ・バイス、手渡されたボールとある夏のユニフォーム。コレクションが上がったときに着用していたものは、汚れても一張羅のまま。「捨られないTシャツ」がまた一枚。



アメニティグッズを見ればホテルのランクが一目で分かってしまうように、日用品にはその部屋のスタイルが表れる。いちばんよく使っているのは、汚れても一張羅のまま。「捨られないTシャツ」がまた一枚。



地図、レシート、何かのお釣り、ビール、お菓子、古いテレビ。さながらロード・ムービーの舞台装置のように、旅の間だけは特別なものが特別に見えてくる。忘れてしまいたくないことが増えていく。



60年代~80年代のアメリカの匂いを残したヴィンテージテーブル&チェア。テーブルは中央のみ可動式で使いやすい。それぞれ名のあるデザインではないけれど、日常に馴染んできた説得力を感じる逸品。